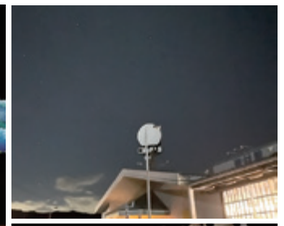
シアター&レストラン「ヒカリノトリ」図図倉庫（ずとそうこ）

11月、図図倉庫で、シアター&レストラン「ヒカリノトリ」が上演されました。企画・構成は、実験的な鑑賞体験を創造する演出家の野宮有姫（ゆうき）さん。現代アーティストや音楽家のパフォーマンス、「田舎レストラン ラカッセ」オーナーシェフ・佐藤雄紀さん（二枚橋・須萱）の料理などが一体となって、図図倉庫を舞台に〝環境世界〟の旅を表現しました。期間限定の10公演で、各回10人定員のチケットはほぼ完売。遠方からもさまざまな世代の観客が訪れていました。

観客は「観測者」として、演者の言葉に導かれ旅に出ます。詩や著書の一節などを記した紙片が途上に散りばめられていて、観測者は心に触れた言葉を手に取り集めていきます。そして、照明、映像、言葉、音楽、展示など、空間を満たすすべての表現を通して、身近な自然の営みや宇宙の存在に思いを馳せ、やがて自身の思い出やルーツにも心が旅する特別な体験を味わいました。



合同会社MARBLiNG（マーブリング）が〝環境づくりの自由研究秘密基地〟としてプロジェクトを展開する「図図倉庫」が丸ごとシアターに。いくつもの場面を彷徨（さまよ）い、観客が物語の一部となって表現を受け止める鑑賞体験は新鮮。

〝自らが存在する時空を観測する旅〟において、言葉や音楽や映像などはすべて〝資料〟と呼ばれていました。コース仕立ての料理もまた〝資料〟です。例えばローストビーフは牛が食べる穀類や豆を内包しビーフコンソメをまとって大地の営みを表現しています。飯舘村の風土を表す仕掛けと味わいに、観測者は感嘆。

いいたて織里音（おりおん）復興ふれあいコンサート「喜びの一歩」

上の写真は「楽しく！コーラス」（奈良県／後列）と共演したステージ。手前の白いピアノ『織里音』が、合唱団の名前の由来になっています。有志による「ふるさといいたて織里音の会」が、「村でもっと音楽に触れる機会を」と寄附を募り、平成５年に公民館に寄贈したピアノです。この日、合唱団「いいたて織里音」と共に、ふるさとを音楽で彩りました。

混声合唱団『いいたて織里音』が、11月19日、交流センター「ふれ愛館」で、〝復興ふれあいコンサート「喜びの一歩」〟を開きました。

佐藤将樹会長（関根・松塚）がプログラムに「帰村の喜びとさらなる復興への願いを込めてふるさとにちなんだ曲を演奏します」と記していたように、第1ステージは、メンバーの菅野允子（ちかこ）さん（佐須）が作詞した『がんばっぺ までいな村』（河合摂子作曲）で開幕。避難中の村の子ども達に贈られ歌われた『ときよめぐれ（までいのロンド）』（山根明季子作曲）は、作詞を手がけた伊武トーマさんと共に歌唱しました。

また、第2ステージには、震災後の交流が続く奈良県の『楽しく！コーラス』と、オカリナグループ『ライリッシュ・オカリナ トゥインクル飯舘』が賛助出演。第3ステージでは、『いいたて織里音』が、合唱曲からポップスまで、多彩な楽曲を披露しました。

そして全員合唱でフィナーレを迎えたコンサート。閉幕後、「歌声に励まされた。明日からまた頑張ろう」「音楽での交流。うれしいね」と観客が笑顔を交わしていました。